ヒデキ兄さんに迫る危機！

ヨシノブは兄さんに会えるのか？
そして巨人島の謎が解明される？

俺は、この島の全体像を把握するために数日間を費やした。この島はおそらく、人型をしている。まるで人が仰向けに寝転がったような地形なのだ。人型のちょうど、口にあたる部分では唇型の、臀部には尻型の岩石を発見することができた。俺は、自分の推測の真偽を確かめようと、へそにあたる部分（そこには巨大なくぼみ、あるいは隆起があるはずだ！）を目指した。

そして巨人が倒れてから四八日目の夜……まったく油断していたとしか言いようがない。俺は忘れていたのだ。この島には、まだまだ沢山の危険が潜んでいることを！

闇夜のなかに、一段と暗い影が動いたかと思うと、次の瞬間、俺は地面にひきずり倒されていた。まるで死がカタチになって現れたようだった。

夜が明ける頃、今度こそ船がバラバラになってしまうのではないかと思うほどの衝撃が調査船を襲いましたが、これを合図にしたかのように嵐は過ぎ去り、海は穏やかさを取り戻しました。調査船はすっかりコントロールを失っていましたが、転覆だけはまぬがれ、ある島の前方に流れ着いていました。

「とりあえず、あの島に上陸することとしよう」

島に上陸したヨシノブとタカコ姉さんは、そのあまりの美しい自然に息を飲みました。濃密に生い茂ったジャングルに極彩色の花が咲き乱れ、果実の甘酸っぱい香りが漂っています。

修理のためにひとり船上に残っていたガルビーが、大声で何か怒鳴っています。二人は調査船を振り返りました。

「おおい！　レーダーが反応してるぞ！　近づいてくる！　おお！　潜水艦に違いない！」

ヨシノブの心に嬉しさと安堵感がいっぱいに広がりました。喜びのあまり思わずタカコ姉さんと手をとりあいそうになったヨシノブでしたが、タカコ姉さんは、すでにちょっとだけ離れた場所に歩み出ていて、手が届きませんでした。ですからヨシノブはただ、タカコ姉さんを見つめました。

夜行性の黒ヒョウが俺を襲ったのだった。抵抗しようもない。人間とは、なんとかよわき生き物だろう！

このとき、俺は強く〝生きたい〟と願った。何がどうなろうと構わないこころづもりで無謀な旅に出た俺なのに、こうして実際に死の恐怖と直面したとき、初めて生きたいと願うとは！ ヨシノブ、また昔みたいに遊びたいな、父さんにも母さんにも会いたい。タカコ、もし帰れたら一緒になろう……俺はいつも、キミに見とれてしまったな。キミは本当にキレイだから。美しい、生命は美しい！

そのとき、俺にのしかかる獣の背後から輝かしい光がさした。朝が来たのだ。四九日目の朝だ。地平線から黄色い輝きが……朝日とともに巨人が現れた。その表情は、優しく穏やかだった。夜行性の黒ヒョウは陽光に照らされ力を失ったのか、俺の身体を解放し、いずこかへ立ち去った。

しかし、俺はすでに致命傷を負っていて、立ち上がることができなかった。傷口から血が流れだし、意識も次第に遠のいていった。ただぼんやりと、仰向けに寝転がったままの姿勢で巨人を見上げていた俺を、原始人が発見した。彼は俺をひきずるようにして、集落へと連れ帰った。俺は薄暗い小屋の中に寝かされた。やがて部族の呪術師らしき原始人がやってきて、呪文を唱え始めた。

夕暮れを迎えるころ、小屋には集落の原始人のほとんどが集まってきて、俺をとりかこんだ。俺の意識はその様子を小屋の天井のあたりから見ていた。呪文を唱える声が次第に高くなるにつれて、俺の意識は俺の肉体から離れ、ぐんぐんと上空へと昇っていき、いつのまにか世界全体を見下ろせるほどの位置にあった。

あの黄色い巨人も、こんな風に世界を見ていたのだろうか？

ヨシノブの姿が見えるよ。だんだん近づいてくる。タカコも。ヨシノブがこの手紙を読むのは少し先のことになってしまいそうだな……。

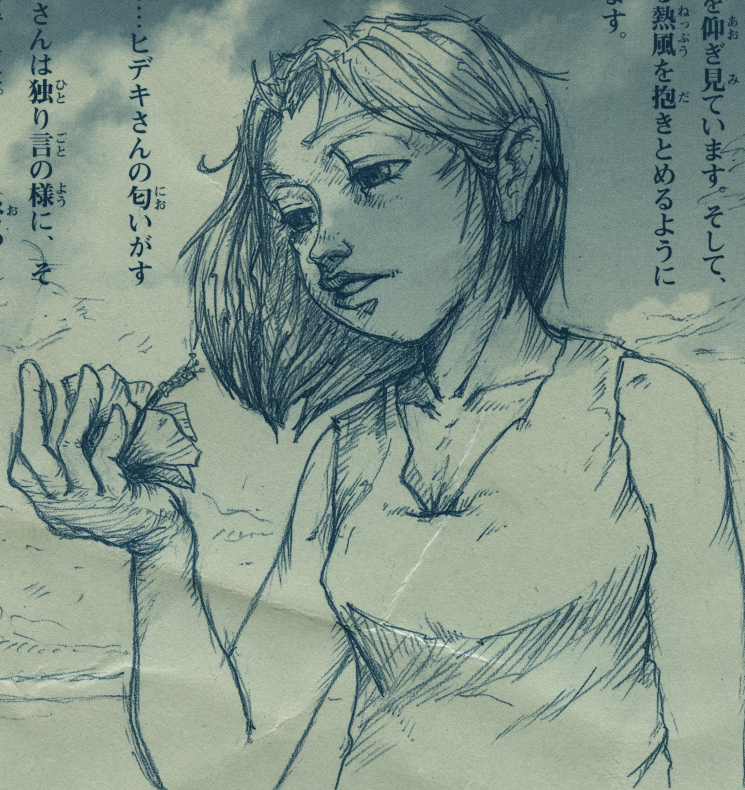
島が日没を迎えた。巨人は日没とともに消え去ってしまう。いつもそうだった……。

ゆっくりと倒れていくような感覚……。

タカコ姉さんは、この島に何か感じるところがあったようです。白い砂浜にうち寄せるさざ波に素足を浸して、蒼い空を仰ぎ見ています。そして、吹き抜ける熱風を抱きとめるように腕を拡げます。

「この島……ヒデキさんの匂いがするね……」

タカコ姉さんは独り言の様に、そう呟いたのでした。

（終わり）

『巨人のドシン1』

ディレクター
飯田和敏

『巨人島からの手紙』全6巻おしまいです。長らくご愛読ありがとうございました。兄がどのような方法で弟に手紙を出していたのか疑問に思われた方が多かった様ですが、僕らも答えることが出来ませんし、その整合性を整えることがそれほど重要だとも思っていません。なぜなら、これは"お話"だからです。もっとも重要なのは、タカコ姉さんの最後のセリフの解釈の仕方です。一つの例を挙げましょう。ヒデキ兄さんは黒豹に襲われた後、シャーマンの力によって巨人として復活し、最後は島になっちゃった。不条理です。でも、素敵です。このような場面を描けることが出来て、僕たちはとても楽しかったです。さて、今回の『手紙』は『巨人のドシン1』の世界観から派生したひとつの物語です。今後は様々な形で『ドシン』の世界を広げていこうと思っています。Paramでは既に新しい『ドシン』のゲームを作りはじめました。また他に、巨人を楽しむための本や、音楽CDなども制作中です。あとは、『ドシン』のキャンペーンなどで全国をまわる計画もあります。僕たちが近くに訪れた際はぜひ、いらっしゃってください。では、また。(http://www.kyojin.com)

チームDDT 原案・文／飯田和敏 構成・文／相良伸彦 画／山崎廉

この三角形の使い方は64DD特集の最後のページをご覧下さい→